

母の心の底からの悲しみを受け継いで

被爆2世 松田ひとえ

旭川市

父に会いたい、母に会いたい、そして力いっぱい抱きしめてもらいたい。

私の両親は広島で被爆しました。当時父は28歳、爆心地から2.5kmのところで一瞬のうちに妻と2歳の娘を亡くしました。隣町の皆実町で、平凡だけど幸せに暮らしていた20歳の母も、爆風に飛ばされ、ガラス片を浴び、夢中で焼けただれた父親を背中におぶり、火の海の中をはだしのまま日赤病院に走ったそうです。その後、焼け野原になった広島で父と母は出会って結婚し、海を渡って北海道のオホーツク海に面した紋別市に、路頭に迷う母の家族とともに逃れてきました。



あの日、あの時、一発の原子爆弾が上空600mでピカーッと光って爆発、大きな火の玉はバリバリと地上のものを焼き尽くし、ドーンと鳴り響き、爆風で家や木々をなぎ倒し、竜巻のように巻き上げました。やがてきこの雲が1万数千mまで（1万mを超えて）高くたかく上がりました。10秒間の出来事でした。

母はその後5人の子供を産みましたが、貧困の中、いつ眠っていたのだろうと思うほど、早出や残業をして、水産加工場で働きました。父は精神的なトラウマで淋しく他界しました。長女の私は、恐れと不安で、自分の将来に希望も持てず、諦めの中、暗い子供時代を過ごしてきました。

母は、原爆の後遺症で骨がボロボロとなり、身体のだるさを抱えながらも、5人の子供を食べさせなくてはと一生懸命働き、人に語る事なく、

悲しみや苦しみを背負い、45歳で亡くなりました。

あれから75年がたちました。私は昨年、爆心地広島にたち、空を見上げました。8月6日の惨劇が脳裏に刻み込まれ、悲しみに、涙しました。

モーリスファノンの曲に「ヒロシマ」があります（加藤修滋訳）。その一節に「何処へ消えたのかヒロシマ 内海には港もなく 漁師の手に魚もなく 日の出もなく 子供達の歌も消えて 怒りさえ 消えた…… あの日あの時のヒロシマ 皮膚は焼けて 肉はとけて 人の影が 石に焼き付き 黒い雨降りつづき 今も心に 黒い雨 ふりつづく……」

私はこの「ヒロシマ」を歌い、当時の惨状に思いを馳せながら、母と父のことを思い出します。

母に会いたい、父に会いたい、脳腫瘍で亡くなった被爆2世の弟に会いたい。

どうか、武器を捨て、争いもなく、差別や偏見、貧困や恐怖のない、悲しみのない、平和な世界であることを、切に希望します。

核兵器廃絶と平和のために、被爆の実相と私たちの家族が背負ってきた苦しみを語り継いでいくことが、被爆二世としての私の大切な使命だと思っています。

父と母に、被爆2世の弟に、原爆で死んだ私の姉に、罪もなく犠牲となった多くの人々を偲んで、この証言を捧げます。

（第4集の文章に続く）

被爆2世 松田ひとえの証言

松田ひとえ
旭川市

皆さんこんにちは、私は旭川から参りました松田ひとえです。本日の学習会に「被爆2世」として語りの機会を与えて頂きまして有難うございます。

初めて皆様にお会い致しましたが、最初に私の自己紹介を簡単にさせていただきます。私は広島で被爆しました両親の長女として、北海道オホーツク海に面しています紋別市で生まれました。父母は焼け野原となった広島市から逃れ出て、父方のご縁があった北海道に来たと聞かされております。



私の幼い頃、ベレー帽を被ったお洒落な父親と並んで、父の妹が宝塚の女優だった2人の写真を見て、「私も将来は叔母の後を継いで、宝塚の女優に是非なりたい！」と高い希望を持って、子供の頃から歌と踊りに励んでいたのを今も覚えております。

母は学校の先生をしていた時に、あの恐ろしい原爆に遭ってしまいました。それからの詳しい流れは長くなりますので又機会がございましたらお話させて頂く事に致しまして、経験した者でなければ実感できない原爆の恐ろしさと、それに関連しているのではないか？と思われまます私たち親族について、簡単に触れさせていただきたいと思えます。

母は5人の子供を育てながらも原爆の後遺症も重なり、昭和45(1970)年に45歳で他界、父は平成元(1989)年脳血栓を患い敗血症にて72歳で他界、残念ながら宝塚の夢も、その他の諸々の夢も叶えられない環境

でした。

「母を返して！姉を返して！」。幼い頃母が私の手をつなぎ紋別のお寺に行くと、納骨堂の中に4つの遺骨があり、思わず「これは誰の？」と尋ねました。それは父が28歳の時でした。あの8月6日、父の元の家族の妻と、2歳の娘と妻の両親と、4人の命を一度に奪った4つの遺骨でした。

私の本籍は広島市宇品でした。父は紋別に長く暮らしながらも、本籍は広島に置いていた訳は何だったんだろう？両親が亡くなり私の本籍が広島なのと父の思いを確かめたくて、広島を訪ねてみました。あの原爆ドームや資料館を見て両親がよく話をしていたのを思い出しました。8月といえば夏休み、当時は戦時中といえども海水浴をしたり親戚の家に遊びに行ったりキラキラ輝いていた事でしょう。母の妹のきみ子さんは女学校に行き勤労奉仕の毎日に被爆し、ケロイド状態でやっと家にたどり着いて直ぐ亡くなったとの事。一方教員をしていた母は父親を背負って爆風と逃げ惑う人々の中、ガラス破片を体中にあび病院に担ぎ込んだ事など、父親は焼け爛れた家族を見てどんな思いだったのだろう！と。恐ろしくて、恐ろしくて、以来私は「原爆の事は忘れよう」と心に封印しておりました。

時は流れ、数年前から札幌在住の私の叔母（母の末妹）金子廣子が広島原爆の体験者として語り部をしている事を知り、世の中もバトンタッチの時代か、私も何かお役に立つ事があるのでは？と叔母に相談し協力頂き色々調べましたら、旭川市でも原爆被爆者を偲ぶ市民の集いが今年で29回もされている事を知り、私も参加させて頂き蠟燭を点して深い思いをはせる事が出来まして、又こうして被爆2世としてのお話の機会に至りました。

先日偶然ですが広島出身の青年と出会い「自分は被爆2世いや3世かな？」と、母親が胎内被爆で彼は成長の段階で「あまり広島の話はするな」と育てられたそうで、それは家族が経験した様々な差別があったからとの事、「今の福島と同じですよ、放射能ですよ」、これにもびっくりしました。

私には最愛の絆の深い一卵性の双子の弟がいます。昨年突然1人は心

筋梗塞、もう1人は10万人に1人という悪性脳腫瘍の膠芽腫の病に倒れ、残念ながら今年7月に亡くなりました。その弟は「姉さん、俺は被爆者の子供だよ。俺は白血病で長生き出来ないんだ」と言っておりました。母は5人の子供を残して早く亡くなりましたが、「子供達に放射能の影響が出るのでは？子供を生むべきではなかった！」等、よく心配しておりました。もしかしたら私だったかもしれないと、最近是我的体も？心配し気にする様になりました。

私は今から24年前、39歳で語学留学を含め、イギリスのロンドンに約2年間生活をして来ましたが、現在シャンソンの講師を務めており、フランス人のジョルジュ・ムスタキさんの作品・日本人武藤ヒロ子さんの訳詞で「ヒロシマ」という曲がありますのでお聴き下さい。

おぼえていますか あの焼け野原に
緑の草木が 芽生えたらうれしさを

忘れていませんか 平和を求めて
いのちを落とした あの若者たちを

戦（いくさ）はあれから 何を残した
ほほえみ奪い 涙さえ奪い

ビルが建ち並び 傷跡を隠す
明日は来るだろう たぶん明日は来る

かげりを知らない 世代が町に行く
いつか遠くなる 遠くヒロシマが

いつか遠くなる 遠くヒロシマが
いつか遠くなる 遠くヒロシマが と お く

第3章 受け継ぐ思い

原爆の悲惨さと同時にこれからも忘れてならない「戦争そのものを無くすよう語り継がなくてはいけない」と思うこの頃で、現在もヨーロッパ諸国での戦争は、人民には何も得る物もなく、温かい心を失う現状を見聞きし悲しい限りです。戦後70年経ちましたが、改めて2世、3世、4世までも命の大切さと平和の尊さを伝えていかなければと思います。最後に多くの人々に歌い継がれてきた心の歌「ふるさと」を歌い終らせて頂きます。

うさぎ追いしかの山 小鮒つりしかの川
夢は今も巡りて 忘れがたきふるさと

如何にいます父母 恙無しや友がき
雨に風につけても 思い出ずるふるさと

志を果たして いつの日にか帰らん
山は青きふるさと 水は清きふるさと

ご清聴ありがとうございました。

(2015年10月24日、中央相談事業講習会での話より)